

## ● 制作

ただ、そこに  
——意味や肩書きとの関係が、ほどけるランドスケープチェインバリン 樹里 園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム (主指導教員: 章 俊華)  
CHAMBERLIN Juli

## 1. 研究の背景と目的

庭園は宗教観・他界観を反映した「楽園」として成立してきた。他界とは本来死後の世界を指す概念であるが、転じて理想郷・楽園の意味を持つようになり、庭園造形と深く関わってきた。日本には古来より「天上他界観」「山中他界観」「海上他界観」という三つの他界観が存在するとされる。

これまでの庭園史研究では、山中他界観や海上他界観と庭園構成要素との関係は指摘されてきた一方、天上他界観と日本庭園との関係については十分に論じられてこなかった。本研究は、挽歌に表れた他界観の変遷と、日本庭園における他界観の表現を時代的に比較し、特に天上他界観が庭園に反映されなかった構造を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究対象・方法

研究は二段階で行った。第一に、各時代の他界観を把握するため、平安・鎌倉・室町時代を代表する勅撰和歌集である『古今和歌集』『新古今和歌集』『新千載和歌集』を対象とし、挽歌 243 首を分析対象とした。

先行研究をもとに天上他界観・山中他界観・海上他界観の概念整理を行った。挽歌本文および現代語訳から死者の行方や他界を示唆する語句を抽出し、得られた分類結果から、各時代における各首を複数の他界観に分類可能なものとして分類した。主要な他界観の割合と変遷を把握した。

第二に、日本庭園における他界観の表現を把握するため、重森三玲・重森完途『日本庭園史大系』を中心とした庭園史文献を調査対象とし、上古から江戸時代に至る庭園構成要素と設計思想を整理した。庭園史文献を通して各時代の庭園に表現された他界観を整理し、挽歌に表れた他界観との比較を行った。

## 3. 挽歌に見る他界観

分析の結果、山中他界観は上古から室町時代にかけて一貫して主要な他界観であり、海上他界観は時代を経るにつれて衰退する傾向が確認された。一方、天上他界観は山中他界観ほど顕著ではないものの、各時代において安定した割合を占めており、当時の他界観の一角を担っていたことが明らかとなった。

## 4. 庭園に見る他界観

庭園史の整理から、日本庭園には上古より一貫して山中他界観および海上他界観が反映されてきたことが確認された。

池を海に見立てる構成や、築山・露地に代表される山の表現は、これらの他界観に基づくものである。一方、天上他界観が庭園造形として表現された例は確認できなかった。

## 5. 考察

挽歌においては確かに存在していた天上他界観が、日本庭園には反映されなかった理由として、天(空)が日常生活と密接に結びつき、特別に抽象化・造形化する必要がなかったことが考えられる。人々の生活は日の出・日の入りと直結しており、天は常に意識される存在であったため、庭園内に再構成する対象とはならなかったと解釈できる。

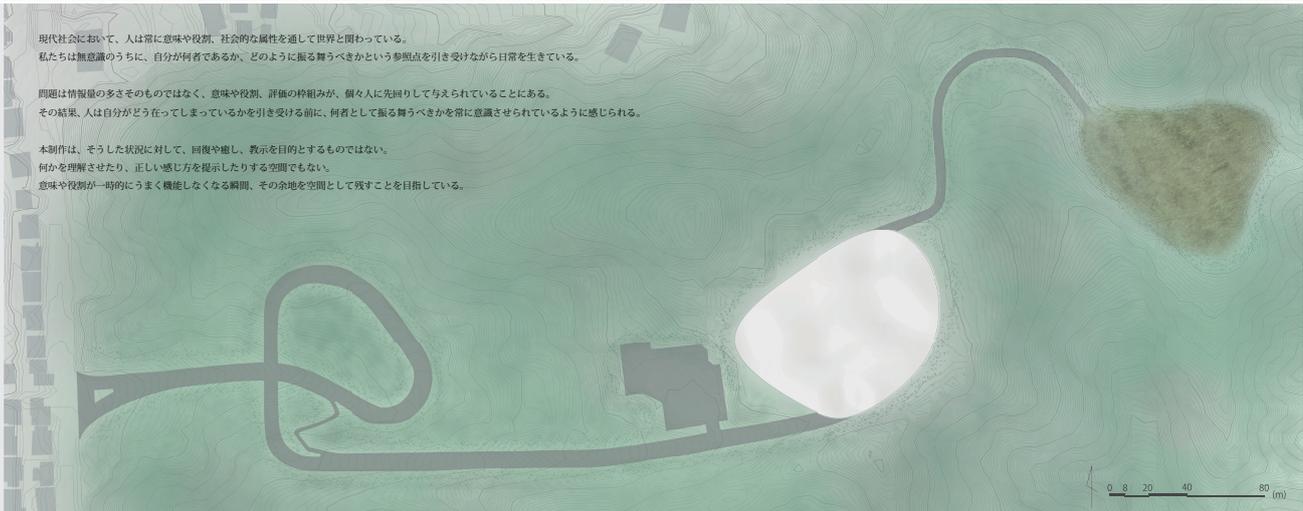
| 時代      | 当時の他界観 (挽歌より) |    |    | 庭園にあらわれる他界観 |    |    |
|---------|---------------|----|----|-------------|----|----|
|         | 山中            | 天上 | 海上 | 山中          | 天上 | 海上 |
| 上古～奈良時代 | ○             | ○  | ○  | ○           | ×  | ○  |
| 平安時代    | ○             | ○  | △  | ○           | ×  | ○  |
| 鎌倉時代    | ○             | ○  | △  | ○           | ×  | ○  |
| 室町時代    | ○             | ○  | ×  | ○           | ×  | ○  |
| 安土・桃山時代 | △             | △  | △  | ○           | ×  | ○  |
| 江戸時代    | △             | △  | △  | ○           | ×  | ○  |

表-1 上古から江戸時代にかけての他界観と庭園

本研究により、日本庭園には山中他界観・海上他界観が継続的に表現されてきた一方、天上他界観は造形的に表現されなかったことが明らかとなった。現代においても天上他界観が主流であること、人々の生活と空との距離が大きく隔たっている状況を踏まえると、天上他界観を現代のランドスケープにおいて再解釈することは、現代人が空との関係を取り戻すための新たな設計思想の可能性を持つと考えられる。

## 参考文献

- ・熊倉功夫, 「茶の湯: わび茶の心とたち」, 中央公論新社, 2021
- ・福田アジオ 他 編, 「日本民族大辞典 下」, 吉川弘文館, 2000, pp. 28-29
- ・佐々木宏幹 他 編, 「日本民俗宗教辞典」, 東京堂出版, 1998, pp. 367-369
- ・佐崎愛, 「近現代の他界観研究の動向と課題」, 『北海道民俗学 第13号』, 2017, pp. 41-50
- ・堀 一郎, 「日本宗教史研究 第2 (宗教・習俗の生活規制)」, 未来社, 1963
- ・大東俊一, 「日本人の他界観の構造」, 彩流社, 2009, pp. 38-72
- ・高田祐彦 訳注, 「古今和歌集: 現代語訳付き 新版」, 角川学芸出版, 2009, pp. 364-381
- ・久保田淳 訳注, 「新古今和歌集 上」, 角川学芸出版, 2007, pp. 334-383
- ・国民図書株式会社 編, 「校註国歌大系 第七巻 (十三代集 3)」, 国民図書株式会社, 1976, pp. 803-819
- ・尼崎博正, 「日本庭園の自然モチーフと表現/水の意味と形態」, 2009
- ・中田勝康, 「全貌 日本庭園」, 学芸出版社, 2020
- ・武居二郎 尼崎博正 監修, 「庭園史をあるくー日本・ヨーロッパ編」, 株式会社昭和堂, 1998・重森三玲 重森完途, 「日本庭園史大系」, 社会思想社
- ・やまだようこ 他 編, 「この世とあの世のイメージ 描画のフォーク心理学」, 新曜社, 2010



現代社会において、人は常に意味や役割、社会的な属性を通して世界と関わっている。  
 私たちは無意識のうちに、自分が何者であるか、どのように振る舞うべきかという参照点を引き継ぎながら日常生活を送っている。

問題は情報量の多さそのものではなく、意味や役割、評価の枠組みが、個人に先回りして与えられていることにある。  
 その結果、人は自分がどうなっているかを受け取る前に、何者として振る舞うべきかを常に意識させられるように感じられる。

本制作は、そうした状況に対して、回復や癒し、教示を目的とするものではない。  
 何かを理解させたり、正しい感じ方を提示したりする空間でもない。  
 意味や役割が一時的にうまく機能しなくなる瞬間、その余地を空間として残すことを目指している。

白い大地は、ホワイトコンクリートと、起伏を抑えた地形操作によって構成されている。  
 明確な方向性や中心性を与えず、視線や身体の基準点が定まりにくい状態がつけられている。  
 ここでは、場所に意味や役割を見出そうとする態度そのものが、うまく機能しなくなる。  
 白は象徴ではなく、意味を立ち上げにくくするための条件である。  
 ひどく均質的な環境は、意味や役割が身体から読み、参照点を失いやすくなる状態をつくる。  
 石は、そうした状態の中で、意味を固定できない物質として存在し、説明や役割を拒む確かさとして、人を引き戻す媒介となる。



草原は、意味や役割が剥がれ落ちたあとも、  
 現実が何事もなかったように続いていることを示す背景であり、それ自体が何かを主張するものではない。



この空間は、何かを与えるためのものではない。  
 意味や役割の手前で、在ってしまっている自分に、気づいてしまう余地を、世界の中に静かに残す試みである。  
 空も、わたしも、ただ、そこに、ある。



「一歩」 アプローチ  
 「どこに行けばいい?」(どう振る舞えばいい?) ならぬ大地 A-白い大地  
 「石」(あ、意外と軽い) (それに、なんか、あったかい) 石  
 「一歩」(先、影がただ、流れている。私もただ。) ならぬ大地 B-草原  
 ならぬ大地 A-ふたたび

|  |                                             |  |                                          |  |                         |  |                            |  |                                                |
|--|---------------------------------------------|--|------------------------------------------|--|-------------------------|--|----------------------------|--|------------------------------------------------|
|  | 森、距離から見える緑の住宅街<br>→ 目線と少し異なる風景が、特徴になることはない。 |  | 一面の白、平地に見えるのだが、歩いてみると緩やかに登ったり降ったりするのがある。 |  | 白に突然、転がる石。              |  | 草原と、上に広がる空。                |  | 進行方向、足元に影が伸びる。                                 |
|  | 「ゴォォ、どわどわわ」 車の走行音、木々のざわめき                   |  | わずかに自分の足音がするが、しないか、風の音、ときおり、飛行機が         |  | 「カツ」「カツ」 石を置く           |  | 一面、草の揺れる音、風。               |  | あまり、音のなさが聞かない。(かもしれない)。                        |
|  | 特徴にしない。上り坂。                                 |  | 足音がしないからか、足裏の感覚が強い。緩い上り下り                |  | 重い/軽い、ざらざら、あたたかい、冷たいかも。 |  | 足裏に地面の質感、影には気が付かない。        |  | 行き先比べて降り下りに足元を察知される。(かもしれない)。                  |
|  | 特徴にしない。                                     |  | 前進するため、影は自分の背中側に落ちる。                     |  | 足元の石の下には土の質感が強く残る。      |  | 車による影、人によっては影や足元に気度として感じる。 |  | 行き先と比べて進行方向に、これによりコンクリートや土が多少読みやすくなる。(可能性はある)。 |